くらしき作陽大学 創立40周年記念 座談会

Kurashiki Sakuyo University 40th Anniversary

くらしき作陽大学創立40周年記念

座談会

座談会出席者	
	松田 英毅（学長）
	石田 一志（音楽学部長）
	馬淵 久夫（食文化学部長）
	松井 輝善（同窓会長）
	上甲 広文（後援会長）

【津山から倉敷への移転】

司会：この座談会は、作陽音楽大学の創設から40年、倉敷市に移転されてから10年という記念の年に、大学の40年間を振り返っていただき、将来についてどのような展望をおもちかというお話をお聞かせいただく座談会です。この40年間を回顧してみますと、学園草創期とは違った意味での激動の時代といいますか、本当にいろいろなことがあった40年間だなというのを感じますが、最初に、松田学長、いかがですか。

松田：まずは本学の母体である作陽学園は昭和5（1930）年に創立されたのですが、創立者の教育理念がすばらしい、すごいものだなあと思っています。人間をつくる教育というのはこうでなくてはならないと創立者は考え、「念願は人格を決定す　継続は力なり」を教育理念に掲げ、日本古来の精神文化を基本とした情操教育を進めてきたわけですが、そのことが問われる時代が来たなと思います。二つ目は、折にふれ卒業生の方とお会いするのですが、昔の卒業生はすごいなと実感しています。地味かもしれませんが、本当に着実に、大変な活躍をそれぞれの地域でされています。

もう一つは難しい時代に入ったということですね。少子化の時代に入っており、私学には、これからさらに厳しい時代になると思うのですが、創立者が作った教育理念を学生たちにいかに伝えるか、しかも社会から強く求められる人材をいかに養成するか、そういうことに全力を挙げていかなければいけないと感じています。

司会：40年間の一番の出来事というと、やはり津山から倉敷への移転でしょうが、移転にあたり東奔西走されていた中で、津山の方が気持ちよく送り出してくださったという胸を打つお話があったそうですね。

松田：あの当時は全国的にたくさん移転があったんです。結局、成功した所は表に出て、成功しなかった所は出なかったのですが、出ない大学がたくさんありました。移転は非常に難しいんですね。本学の場合も難しいケースでした。

昭和50（1975）年代の半ば頃から少子化がみえてきました。地方の大学は大変になるぞ、どうしたら生き残れるかを考えなさい、と中央でいわれ始めました。うちも地方の大学で、しかも小規模な大学でしたから、どうしたらいいかと常に考えていましたが、やはり津山では難しいという結論に至りました。

昭和60（1985）年は丙午の子供が18歳になって大学に入学する年で、その時が一つの目安だと思っていたんです。受験生がかなり減りますから。そうしたら、予想よりもたくさん減りまして、少子化になったらそういう現象が毎年続きますので、いよいよ南に出る腹を決めなくてはいけないということになりました。あちこち土地を見て回りました。最初は博多や神戸も候補地でした。結局、現実問題としては、この県南しかないということで、県南

に出ようと決めました。当時はバブルの頃で、よさそうな所は、ほとんど東京の大手企業の開発で押さえられていました。最終的に、東岡山駅から5キロくらい北にある矢津という地区の土地を手に入れて全面移転しようと決定しました。

昭和62（1987）年に短大の情報処理学科を作って、その後、自己資金で徐々に全部を移転しようという計画を立てたんです。そうしましたら、平成になって倉敷市長が替わり、大学二つを誘致するという公約をされて、その一つに本学が当たったんです。ちょっと全国的に例がないような好条件を出されました。実は、情報処理学科の所在地は交通の便が非常に悪く、バスも通わない。歩いたら駅から40分くらいかかります。コンピュータの関係で、学生は当時非常によく集まったのですが、アクセスが悪いので、やはり新倉敷がいいということで、こちらに変えました。

移転は平成4（1992）年の12月12日に理事会にかけ、決定してもらいました。倉敷市の方はすでに準備をして待っているわけです、「理事会は早く決定を出すように」と。津山の方の反対が予想されたのですが、その中でも一番気をつかったのがアパートの管理人の方々でした。当時、学生は各地から集まってきてアパート住まいをしていました。100名くらいが入れる寮がありましたが、寮生と自宅通学生以外は皆アパートに住んでいました。もしアパートの方が全員反対されたら、移転はもうお手上げです。だから、そこが一番肝心でした。管理人の組合がありますので、理事会の直後、すぐその足で事務員2人とともに菓子折りを持って役員の方を訪ねました。説明して理解をしてくださいと何軒も回りました。中にはかなり厳しくおっしゃった方もおられました。その中の、あるアパートの管理人の奥さんが、私たちの説明を黙って聞かれて、しみじみとこういわれました。「私たちはお宅の学生のアパートを経営してそれで生活をしています。目の前から作陽がなくなってしまうのは、本当に悲しいし、辛いことです。生活がかかっていますから。しかし、私たちは自分たちが作陽を今日まで育ててきたという誇りをもっています」と。といいますのは、学生は大学に来る時間以外はだいたいアパートにいて、その間、女子学生が多いですから、里親みたいな気持ちで見ておられたんです。夜遅くなったら帰ってくるまで待っているとか、病気をしたら寝ずに看病するとか、そういうことをずっとしてこられている。だから、作陽は自分たちが育てたという自負があったんです。「それがいっぺんに出ていったら本当に辛い。だけど、作陽が南に出るというのには、それなりのちゃんとした考えがあるのでしょう。それだったら移転を成功させてください」といわれたんです。その言葉を聞いて、びっくりしました。

それまでは、出て成功するかどうかわからないし、失敗したら大学だけでなく学園全部が潰れる可能性もある。そういう状況でしたから、私自身も気持ちがふらふらしていたのですが、その言葉を聞いてからは、どんなことがあっても成功させなければいけないと思いまして、それからはとんとんと進めたんです。中には確かに反対された方もいましたが、一般の方たちは、むしろ「自分たちが育てたんだ。南へ出て頑張れ」というお考えでした。非常にありがたかったですね。

学長　松田英毅

現在のこのキャンパスは、もともとは小高い山でした。約5万坪ありますが、それを造成して真っ平らにしたわけです。地権者が200名くらいいらっしゃったと思うのですが、交渉して売っていただいて、造成がなされました。また、道路も今のような4車線ではなくて、建築中の小学校からこちらは本当に畦道だったんです。小学校までは1本道で、1車線の道路でした。それを4車線にするには、家が何軒も立ち退かなければいけない。それも交渉して立ち退いていただきました。それは県がしてくださいました。ですから、校地造成も道路整備も、しようといっても反対者がいたらできなかったわけですが、全部を市と県が誠意をもってしてくださったんです。津山の人といい、倉敷の方といい、大変な理解と協力があったと思います。

移転がどうしてこんなにスムーズにいったのかなと考えた時に浮かんできたのは、やはり卒業生が郷里に帰って、着実に頑張っているということでした。そういう様子を市長や市会議員などの関係者がご覧になって、本学だったら来てもらってもいいかな、と思っていただいたのではないでしょうか。だから、卒業生やそれを育てた先

輩教職員の方々は、すごいなあと思いました。そういうことで、今に至っています。

司会：移転に関しては、卒業生の方たちの間でも意見の相違があったと思うのですが。

松井：様々な意見があったみたいですね。「作陽音楽大学」という名称を大事にしてほしいと思っている人は今でもいると思います。だけど、私自身の考えとしては、もうそういう時代ではない。それこそ大学も一生懸命やっている。やはり卒業生として、できるだけのことはしたいという気持ちで、同窓会長をお引き受けしたわけです。

司会：先ほど教育方針のお話が出ましたが、卒業生の方々も在学中には何かにつけ、大乗仏教に基づく教育方針を感じられたと思いますが、いかがでしたか。

松井：そうなんです。びっくりしました、最初はね。

松田：「宗教」の授業が2年間必修ですからね。前学長みずから熱弁を振るって講義していました。私は今、やっていませんが。

松井：そういう建学の精神とか、宗教というか、浄土真宗の教えを学長ご自身に教えていただきました。学生の家庭によっては宗派が異なるところもあるでしょうから、どうかなと思うところもありました。でもね、「念願は人格を形成す　継続は力なり」ということは当たっているのではないですか。この言葉は使いますね、いろいろ。僕が話す時にも使う。何か知らず識らずのうちに感化されています。

松田：宗教というより、宗教を超えた基本的な部分、人間として生きる道、そういうところをしっかり説いたと思います。

司会：ところで、校舎の建築にあたって建築家を決める時に、西洋ばかりではなく和の雰囲気が入ったものをと希望されたそうですが。

松田：この建物は吉村順三という建築家によるものです。もう亡くなられましたが、日本を代表する建築家でした。本学の校舎が、たぶん最後の作品です。

実は津山時代、日本フィルハーモニー交響楽団常任指揮者で、日本芸術院の会員だった渡邉暁雄先生が副学長に就任された時、関西で初めてのオペラハウスを造りたいと考えられ、設計をお願いした方が吉村順三先生だったんです。ところが設計ができて地鎮祭を済ませ、建築にかかったら、2日で工事が動かなくなりました。反対者がありましてね。結局津山では実現せず、新しい所でその方にお願いしようということになったわけです。吉村先生は西洋建築が主ですが、日本の文化を非常に重視されていて、奈良博物館やニューヨークの有名な建造物などを手がけられていました。本学は教育理念の根本に仏教の教えを据えていますから、日本の伝統文化を重視する先生にお願いしたいという気持ちがありました。

司会：音響効果などもすべて計算されていて随所にこだわりがあり、完成までにかなり時間がかかったように伺っているのですが。

松田：特に私が聞いている「こだわり」というのは、外壁の色です。ご本人は東京にいらっしゃって、お弟子さんがこちらで張り付いて監督をされていました。思った色になるまで、70 回くらい塗っていましたね。最初は「何だ、この色は?」という感じでしたが、見ているうちにだんだん周囲に溶け合って、さすがだと思っています。

【移転後の音楽学部の取り組み】

司会：倉敷移転後、食文化学部が創立され、音楽学部に新しいコース（当時）ができましたが、音楽学部は変化に富んだ取り組みをされていますね。

石田：私はこの春に音楽学部長に就任しましたので、本学の歴史についてはあまり詳しくないのですが、この40年間は世界でも日本でも音楽の世界が大きく変化し、音楽学部や音楽大学を取り巻く環境も変化した時代です。1960年代後半は世界的に見ますと、現代音楽とか前衛音楽とか、革新的な創作活動が盛んな頃でした。その当時の学生たちは、ちょうど戦争が終わった頃に生まれた子たちで、そういう新しい可能性にみんなが期待を寄せていました。象徴的にいえば、昭和45（1970）年の「エキスポ70 大阪万博」では未来志向が前面に打ち出されました。エキスポ自体が音楽の祭典といえるくらいでしたが、その中でも新しいメディアを活用した未来志向の電子音楽やコンピュータミュージック、映像などを伴うミクストメディアなどが中心になりました。

ところが、その後、単なる未来志向ではなくて、歴史や伝統を見直し、人間とは何かと問い直す、モダニズムに対しての一種の反省が起こってきた時代を迎えます。例えば日本ですと、この大学の大きな特徴になっている「日本伝統芸能」という専修があります。これは、箏の授業という形では早い時期からあったようですが、移転後は、器楽だけではなく、日本舞踊や琉球舞踊あるいは狂言など、伝統芸能全体を扱うようになりました。これは国内でもあまり例がありません。

名高い演奏家や師範から直接指導を受けられるということも魅力だと思いますが、1年次に総合実技として、能、狂言、箏曲、長唄、琉球舞踊、日本舞踊など幅広い分野を一通り体験できるというカリキュラムはユニークであると思います。いろいろな伝統の世界を巡ることに

与えられる、託せるものがあるような大学に、ぜひ高めていってほしいと思います。

【これからの「くらしき作陽大学」】

司会：この大学は開かれた大学ということで、地域との関わりを積極的にもたれていますが、一方で日本の中での位置づけも考える必要があります。石田先生は、大学の今後の方向をどうお考えですか。

石田：先ほどから文化という言葉をよく使っていますが、現在、文化は世界に通用すべきものですが、同時にその地域や風土の中でオリジナリティーをもったものを、世界との繋がりの中で展開することも求められている時代です。本学は、特に関西以西の音楽界では責任ある立場にあると思います。だからといって倉敷から世界にいっぺんに行くのではなく、中国・四国を中心にどのくらい深く浸透していけるか。そして、この地域が古い歴史と、多彩な伝承・伝統文化をもっていることとの結びつきも含めて、新しい音楽文化を、本学を中心として地域に創ることで、恐らく国際的な意味ももてるのではないかと思います。

大事なのは、大学もやはり社会との結びつきをもたないといけませんし、幼稚園児にも、小学生や中学生、高校生にもきちんとした役割を果たさなくてはいけないと思います。そういう世代の問題と地域の問題、両方に深く浸透していきたいと考えています。演奏活動でいえば、学内で年間だいたい60から70の音楽会を開いています。これらをこの地域に伝えていくだけでも変化は起こると思います。

馬淵：私どもも、まったくそのとおりに考えています。地域と世界に向けて、両方やっていかなければいけません。食文化学部の科目や行事は、ある程度それを考えてやっています。例えば、地域文化論という科目を1年生か2年生の時に履修しますが、岡山県の文化行政に関わった方などに講義していただいています。行事では、玉島の栄養祭りに毎年要請を受けて積極的に参加しています。そういう地域との関わりに努力する一方で、3年次には地球環境史を学び、「地球の環境はどうなっているのか」ということも実感してもらいます。栄養士になっても、食品企業に勤めても、職場に出て実際に働いている時に地域のことから地球規模のことまで頭に入れながら、自分の仕事場でそれらをどのように活かしていけるかと考えてもらいたいですね。それを目指した教育を続けているので、その方向は絶対変えてはいけないと思っています。

司会：では最後に、松田学長、これからの「くらしき作陽大学」に寄せる思いをお話しいただけますか。

松田：これからの時代は、「何のために生きるのか、本当の幸せとは何だ」ということがわかる人を育て、そういう問いへの取り組みがなされる社会を創っていかなくてはいけないと思います。これまでも実践してきましたが、さらに力を入れなくてはいけないでしょう。けれども、現状を見た場合、それに加えて専門的な、特に科学に強い、資格や技術を身につけた人材を養成していかなくてはならないと考えています。やはり二つの方向のどちらにも力を入れなくてはいけないと思います。食文化学部と音楽学部は、どちらも芸術と文化を主とした学部ですよね。食文化学部では栄養士という資格が取得できますが、日本の社会は就職に強い大学を望んでいるんですね。ですから、それを抜きにしては大学の未来は考えられないんです、残念ながら。本学がやっているような人間教育をきちっとやらなくてはいけないのですが、世の中全体は、まだそういう方向には向いていないんですね。ですから、社会のニーズに合った教育を進めていくと同時に、従来以上に人間教育に力を入れて、人間性を培っていかなくてはいけないと思っております。

司会：今日は長時間、ありがとうございました。これで座談会を終わります。

指導の面を栄養士の役目とするように変わってきています。食文化を支える人材としての面と、栄養士や調理師としての面の両方に重点を置き、食品の世界を通じて社会に貢献できるような人材を育てる、そういったジャンルを探していかなければなりません。

【卒業生からの大学への期待】

司会：上甲さんと松井さんは卒業生として、大学への要望や提案などをおもちでしょうか。

上甲：2人とも教育現場に携わっています。そうすると、一番基本になるのは、「人として、社会人の一員として基本的なものを身につけて、自分で表現しようとすることが相手にきちっと受け入れてもらえる。自分を伝えることができ、共存していける。その中で、自分のすばらしい部分をどんどん周りへ浸透させていける」ということだと思います。

若い時は、下手をすると一つの狭い分野をただ深く勉強すれば、それだけで自分がものすごい力を得たように錯覚してしまいますが、それだけでは駄目になります。その身につけたものが、どうやって周りに理解されていくかということが大事なので、その両方を合わせもたなければいけないと思うんです。だから、大学教育で、ただ知識や技術を教えるだけではなく、それをいかに自分という人間を通して周りへ伝えていくことができるかということを、もう一つ幅を広げ、教育の根幹の部分を掘り下げて、学生にわかりやすく教えていただきたいと思います。

大学生は社会から大人扱いをされるのですが、今の日本全体を考えると、みんながいろいろな形で手をいっぱい加えて子供たちを育ててきています。それを大学に入ったからといって、「もうあなたたちは大人だから」とやってしまうと、そこにすごいギャップがあるんですよね。大学の先生方が育ってきた時代と今の子供たちが育ってきた時代とは、考え方や教え方がずいぶん変わってきていると思います。そういったところも踏まえた上で、今の時代に通用するような学生を育てていっていただけるとありがたいなと思います。

後援会長　上甲広文

学部や学科が増えてきたのは、大いに結構なことだと思います。いろいろ改革があって歴史というのはできていくものですが、一度できたものを死ぬまでずっとそのまま受け継がないといけないというものでは決してないと思うんです。やはりその時代時代の要望はありますし、それをうまく吸収しながら、いかに社会に必要なものを育てていくかということが大事ですから。「この大学はこれが一番中心になる部分だ」というものをきっちり守り通した上で、それにプラスできるものをどんどん入れて改革していく。そうしていかないと新しい伝統はできないだろうと思います。伝統は、守るだけではなく、人が創っていくものだと思いますからね。その流れの中のとても大事な時期に今、あるのではないかという気がします。

松井：両学部の多くの卒業生にもたぶん当てはまると思いますが、私が卒業後思ったのは、小学校教員の免許などが取れたらよかったなということです。本学では小学校教員の免許が取れませんから。だから、ここを卒業したら、また通信教育などで小学校の教員免許を取りに行かなければなりません。今、中学校の校長をしていますので、そういうことを思います。

教育の専門化は、社会の専門家の仕事が細分化していっているのでとてもいいことだと思いますし、エキスパートを養成していくのも大事なことだと思います。社会の要請がそういう方向にありますから、音楽の専門的な部分を深められる学科や専修があるというのはとても幸せなことです。他にはないものをどんどん創っていくのは、すごくいいことだと思いますね。

先生方は耳が痛いと思いますが、やはり学生が変わっているのですから、教える側も変わっていかないといけません。どんどん改革して、人間として大切なことを教えられる先生方がさらに増えるといいなと思います。もちろん今もそのような先生はいらっしゃるのですが、さらに磨きをかけて、建学の精神に基づく人間教育を充実させていってほしいと思います。

上甲：あと一つ考えますのが、小さい時からエリート教育で音楽を勉強してきた人もいますし、何かきっかけがあって、かなり遅くなって音楽に目覚めた、食文化に目覚めたという人もいるわけです。入った時にもう宝石としての輝きをかなりもっている人をいっぱい集めて、さらに磨きをかけるということも必要かもしれません。でも、それだけではなく、原石に近い状態の人にもうんと磨きをかけて本来もっているであろう輝きを引っ張り出していく。そして、自分に自信をもたせ、自分を律していける人間を育てていってほしいと思います。必ずしも初めから輝いている人ばかりを対象とするのではないということです。世の中にはいろいろな子供がいますから、彼らに希望を

司会：音楽の方も、卒業後はいろいろな進路があると思うのですが、いかがですか。

石田：確かな統計ではありませんが、現在日本では、音楽関係の大学の卒業生が毎年1万5千人から2万人くらいいるそうです。例えば、プロのオーケストラ連盟には所属団体が23ありますが、一つのセクションがあくと、膨大な数の卒業生の中の腕に自信がある者が一挙に50人、100人と受けに来ます。オーケストラに入れたからといって経済的に安定するとは限らないのですが、やりたいと思っている人は多いわけです。

卒業後の進路に関しては、長い目で見た場合には二つあると思います。例えばプロのオーケストラは東京に10前後あり、一つの都会にそれだけの数がある例は世界にありません。各県や大きい市にプロが一つずつあってもいいと思うんです。それに見合うだけのホールが、もう日本中にあるわけですから。そういう意味で、もっと優れた演奏家を育てなければいけないということが一方にあります。

もう一つは、日本の音楽教育が今まであまりにも西洋をモデルにしすぎてしまった。その結果、歌舞伎も文楽も生で見たことのない青年がたくさんいます。外国人から見れば、日本人が日本の伝統文化を知っているのは当然です。ところが、知らない。しかも、西洋の演奏家や作曲家や作品を詳しく知っていても、それらを大きな文化の中の一つとして捉えているわけではない。やはり、我々は我々の文化をはっきりと自分のものとして身につけ、同時にそれを客観視できる目、あるいは国際的な基準で見られるような目を養うべきではないかと思います。本当の意味での音楽専門家というのをもっと育てたいですね。そうすれば卒業後の仕事の範囲も広がっていくのではないかと思います。

司会：そういう音楽に関する新しい専修のプランや食文化学部に関する次の構想は、すでにおもちですか。

松田：これからですが、今、お話に出たように新しい時代に向かって音楽学部を再編成しなくてはなりませんので、早速取りかかりたいと思っています。

馬淵：食文化学部は、今、一つの柱が栄養士系ですね。栄養士という免許を取り、さらに受験して国家試験に合格すると管理栄養士資格が取れます。これは高校生にはわかりやすいので、大勢受験してくれます。もう一つは、食品の文化は広範囲で、すべての人間に関係があるので、それにマッチした仕事に就ける人材を養成する学科が重要です。それでフードシステム学科を作ったのですが、受験業界にはないカテゴリーだから、高校生にはなかなか理解してもらえません。だから、自分でこの学科を見つけて入ってきた学生の多くは、すごく熱心で覇気があります。ただ、大勢の学生に来てもらうのは難しく、この面をどのように展開するかは、食文化学部の今後の課題だと思います。

世の中では、「食」というと栄養士や調理師と結びつきます。ですから、もう少しそちらを強く打ち出すのもいいかなと思います。平成14（2002）年度から栄養士法が変わったのですが、簡単にいうと、昔は大切だといわれた調理を少し軽くして、生活習慣病をなくすような生活

に討議しました。様々な案が入った結果を毎回議事録としてとっておき、それを踏まえて私が代表して学長とお話をしました。その話し合いを受けて30数回も案を作り直しました。その結果、食物文化学科と芸術文化学科の2学科の学部を新設するという案に、いったんはまとまりました。

というのは、食物文化学科は短大の家政学科を継承するものになりますし、芸術文化学科の方は、音楽芸術の要素を音楽文化として捉えることを考えたからです。同様に音楽文化として捉えることを考えたのが、アートマネジメントと日本の伝統芸能的なもの、特に舞台芸術です。どうしてかというと、私が文化庁の研究所にいた頃、企業が芸術活動に力を入れるメセナ活動が盛んでした。文化庁がその音頭をとってアートマネジメントを奨励したりして、芸術活動を盛んにしようという機運があったのです。最終的には、本学のアートマネジメントのコースは、紆余曲折を経て音楽学部に作りました。でも、アートマネジメントと日本伝統芸能の要素は、今お話ししたように平成9（1997）年の食文化学部開学以前から準備していたんです。

結局、食文化学部は、当時の厚生省の認可を得て、食文化の研究と栄養士養成施設という二つの面をもった学部として、1学科で平成9（1997）年に出発しました。音楽学部との調和という点では「食というのは音楽とよくマッチするものです。芸術的要素もあります」というような話をしました。「この学園でもっとも将来性があり、この地域のニーズに合うような学科は何だろうか」と先生方とも相談した結果、こうなりました。

5年経った平成14（2002）年度には、東岡山の短期大学の定員を食文化学部に移し、学科を増やして3学科にしました。最初は食生活学科だけだったのですが、平成14（2002）年度からはフードシステム学科と、栄養学科、管理栄養士養成課程ですね、これも入れました。ちょうど今年（2006）の3月に両学科の最初の卒業生が出たところです。

【卒業生の活躍】

司会：食文化学部の最初の卒業生は、どういう所で活躍されているのですか。

馬淵：食文化学部の第1期生が卒業した平成13（2001）年の春から、就職率はほぼ100%近いんです。努力しましたからね。仕事の分野は、食物関係ですから非常に有利です。というのは、産業を見ても、2割から3割は食品産業です。従業員の数でも、会社の数でも。3学科の卒業生は勉強している内容が少しずつ違うのですが、一つは栄養士の勉強をし、国家試験を受けて管理栄養士になる学生がいます。今みんな喜んでいるのですが、第1期卒業生の内60人が現役で管理栄養士に合格したんです。これは大きいですね。その人たちは主に栄養士や管理栄養士を必要とする職場である病院や老人ホームなどに勤めています。それから、食品企業。フードシステム学科の卒業生は栄養士とは違う方面の食品企業とか、お菓子作りの職場など、いろいろな所に就職しています。

食文化学部長　馬淵久夫

司会：食にしても音楽にしても、技術的なものとしてだけでなく、文化として捉えるという視点を重視されてきたようですが、松田学長は、最初にそういう方向をお聞きになられた時は、どのように思われましたか。

松田：やはり、将来的には大切な方向ですね。今の世の中がまさに技術中心の世の中になって、閉塞感があります。文化とか芸術、人間の感性を育てる非常に重要な分野が今の社会では疎外されています。けれども、将来は必ずこの分野の教育が花開くと思います。

馬淵：「文化と実学」は相反するともいえますが、両方が必要です。実学というのは、つまりすぐ就職できることで、それはある程度、目標に達しています。しかし現在は実学に重点が置かれ、先生方はもちろん文化をもっていますが、文化の要素が少し不足してきているので、これを今後の展開でどう考えるか。これは食文化学部の将来を考えると、一つのポイントですね。

文化的な知識なり経験があると、仕事をするにしても発想が広がります。そういうのがデータに現れないかと思い、4、5年前に、入学してすぐの1年生にアンケートをしたことがあります。「あなたは栄養士を目指して来たのか、食文化という要素に惹かれて来たのか?」と。そしたら、14%が文化に惹かれて来たというんです。食文化という学部名を見つけて、青森とか、鹿児島とか、遠方から来るんですよ。食文化をやっている大学は他にはないと思って。でも、全体としては、やはり免許や実学志向なんですね。ですから、両方を大事にしなくてはいけません。1期生、2期生の中には熱心な食文化探検家がいて、女性ですが、今、タイに住んで食文化を勉強している卒業生もいます。

なっていかがですか。

松井：言葉は悪いですけど、雲泥の差ですね。今の大学の建物はすばらしいです。津山の頃も高台にあって、ちょっと雰囲気が似ているんです。津山では河原の道を歩いて大学に通っていましたね。音楽をやりたい、やれる喜び、そういった気持ちで、みんな一丸となっていました。私たちは1期生ですから。学生も先生方も、もちろん経営の方も、理事長さんも、みんなに何とか大学を盛り立てないといけないという気持ちがありました。先生方との交わりも遠慮がなく、学長も困られたことがあったと思いますよ。

同窓会長　松井輝善

松田：そうでもなかったですよ。大学を変えようと目論む学生が本当に変えちゃったりしましたね。日頃の不満とかも出して、コミュニケーションはよくとれていました。そんなことが津山時代は再々ありました。

松井：環境を整えてほしいといった願いはありました。一番よく申し上げたのはホールのこと。当時、藤花楽堂のような音楽ホールがなかったですからね。「音大にホールがないなんて、どこでやるんだ?」と、よく話したものです。

上甲：当時は本当に自分たちが大学創りに携わらせていただいているという気合を、みんな感じていました。大学ができて間がないと卒業生がまだ現場に出て活躍していないから、自分たちがここでどれだけ学んで力をつけ、「社会に出てどれだけ何かを残せるか」「自分なりに満足のできる仕事ができるか」と考えるわけです。本当に力のない自分ですから、世間で通用するだけのものをみんなで競争しながら先生方から学び、必死の思いで食らいついていった。その思いは、みんなに共通していると思います。それを嫌がらないで、先生たちはきちっと向かってくださった。若さゆえの失礼な言動も多々あったのではないかと思いますが、それでお互いの仲が悪くなって反発し合うことなどないわけです。真摯に耳を傾けていただいて、ではどうしたらいいかと話を聞いてくださったんです。その積み重ねがあって改善もなされ、現在に至ったのではないかと思います。

松田：学生同士あるいは学生と先生や職員、非常に密なものがありました。みんなで創っていこうという意気込みがあったのでしょうね。例えば、昭和47（1972）年にメサイヤの演奏会がありました。うちの学生オーケストラがやり、ソリストが立川澄人さん、中村健さんと本学の戸田政子先生、三枝喜美子先生でした。立川さんと中村さんが学生たちと初めて練習した時、学生のレベルの高さに驚かれて、部屋に籠もって練習されたんですよ。その演奏会は、会場のステージが小さくて合唱とオーケストラが乗れないことがわかった。そこで、学生たちは体育館の横の大きな下駄箱をトラックで運んで補助ステージを作り、それで何とか間に合わせるというようなことを平気でやっていました。大学がやれというからではなく、学生が全部率先してやらなくちゃという意識がありましたね。今は、施設は、たぶん音楽系では全国でも指折りだと思いますが、残念ながら、それが実感されていません。当時は施設は貧弱でしたが、人間関係は密な暖かいものがありました。それが今、欠けていると思いますね。

そういう先輩たちが今、各地の中学校や高等学校の先生として、また音楽教室などの指導者として活躍されています。先輩方の人間性が、今、本学に大きな影響をもたらしているのではないかと思います。

【食文化学部創設への道程】

司会：食文化学部の取り組みは、いかがでしょうか。

馬淵：まず、食文化学部の歴史からお話しさせてください。私は、東京の文化庁の国立文化財研究所で定年を迎えました。その時、私が昔からパイプオルガンをやっているのもご存じの松田学長から短期大学部長就任の要請を受け、津山に赴任いたしました。それが平成4（1992）年の4月です。平成4年は18歳人口が一番多かった年ですから、まだ学生募集は楽でしたが、学長は移転と学部新設を考えておられました。移転の計画は内部で進められていましたが、当時の文部省は大学や学部を創ることを制限していましたから、音楽大学を移転して学部を新設するとすれば、短期大学の定員を減らさなければならなくなるわけです。これには短大の大半の先生がショックを受けたと思うんですね。当時の短大は、津山に家政学科と幼児教育学科の2学科があって、東岡山に情報処理学科がありました。この3学科をどうするかという問題になりました。

その際、やはり教員の考えや希望も学長に知っていただいた方がいいということで、ワーキンググループを作ることを提案したんです。平成4年の12月に各学科の先生方が集まり10人くらいのワーキンググループで5回、熱心

より、全人的に日本の心を体感できるという特色があります。これは、日本における万博後の日本回帰のような現状と深く結びついています。

音楽学部長　石田一志

また、日本の音楽界が、受信だけではなく、本当の意味で国際的な発信をするようになったのがその頃からです。最初は西側諸国との縁が中心でしたが、次第にロシア、東欧など旧社会主義の国々との新しい関係も大事になりました。80年代から90年代の初めというのは、ちょうど社会主義の国々が崩壊する時期に重なるのですが、西側諸国では、この頃ロシア音楽ブームが起こりました。音楽が西側で辿ってきた道も、東側で辿ってきた道も、やはり問題があるのではないかという見方で新しい発信を始めたのがロシアだったんです。そういう時期に、本学はモスクワ音楽院と特別な提携を結んだわけです。

「日本伝統芸能専修の開設」「モスクワ音楽院との提携」、この二つの取り組みだけでも国際的に意味があると思います。加えて、新しいメディアと結びついた電子音楽専修やコンピュータを駆使した音楽デザイン専修、音楽を医療に結びつけた音楽療法専修、芸術事業を企画して実践していくアートマネジメント専修など、従来の音楽大学とは異なった新しい専修があるのは、大きな特徴だろうと思います。

司会：松田学長のご専門は音楽ではございませんが、音楽学部で新しい試みをタイムリーになされるのは、世の中の情勢を常に意識されているからですね。

松田：素人なりにアンテナは常に立てています。渡邉曉雄先生が亡くなられて、その後音楽のリーダーがいなくなってしまった時、私自身が音楽は全く門外漢なので、岩城宏之先生を招聘しました。先生ご自身は「自分は音楽家であって教育者ではない」とおっしゃっていましたが、私から見たらすごい教育者でもありました。学生たちが音楽的な刺激を受けて、よかったと思います。岩城先生のご就任は平成6（1994）年で、倉敷市に移転したのが平成8（1996）年。その翌年、音楽学部のいろいろなコース（当時）や食文化学部を創立し、「くらしき作陽大学」と改称しました。モスクワ音楽院との提携は、平成12（2000）年です。直接提携して、モスクワの先生が常駐してレッスンをし、教育方法もモスクワ音楽院と同じというのは、たぶん日本では初めてですし、世界でもあまり例がありません。

音楽学部の新しいコースを考える時、まず思ったのは、日本の伝統文化、精神が大切だということ。日本の音楽大学はほとんど洋楽が中心で、日本の伝統音楽をやっている大学は少ないです。日本人が世界で本物の音楽家として活躍するには、そういうものが土台にないと物真似になってしまい、西洋の文化で育った音楽家には太刀打ちできないと思います。それから、音楽療法などの新しい分野は常に開拓していかなくてはいけない。社会からも需要があるような分野の人材を育てなくてはならないという思いがありました。

石田：音楽学部には多彩な専修、陣容、また学生たちにも様々なタイプいますし、本学は都会の大学とは違ってキャンパスが丘の上に一つの塊としてあり、そこがミクロコスモスというか、小社会みたいになっているおもしろさを感じました。ただ、発信についていえば、相互関係や協力関係をもっと強めて新しいメッセージを作れないだろうかという印象はもちました。

日本の伝統芸能文化に関して、今の若い方たちは日常の和から非常に隔たっていますから、まずそこで和に接しなければ次の文化に行けないわけです。例えば食生活だって、もっと地方色豊かな料理を日常的に食べたり、畳の部屋で生活したりすれば、日本舞踊の足の配り方とかにも繋がっていくと思うのです。身近な和の文化は、なかなか難しいですね。

また今、高校生の音楽への関心、特に吹奏楽への関心は全国的に高いものがあります。本学でも岩城先生の時代に、オーケストラが大変な難曲に挑戦したり、荒療治をしながら鍛えていくことがありました。ですから、オーケストラ、そして今人材が豊富になっている吹奏楽、またマーチングといったチームワークが必要になる活動はかなりレベルの高いものになっています。しかし、音楽的な質ということでは室内楽や小アンサンブルなどがもっと盛んになる必要があります。

ともかく、創立期に在学された先生方と同じ世代に当たる方たちが、例えば九州交響楽団のような地域のプロの代表的なオーケストラで要職に就いていたりしますので、OBの人脈が豊かに実ってきているのではないかと思います。

【みんなで創りあげた大学】

司会：上甲さんや松井さんが大学で学んでいた頃とは様子が変わっていると思いますが、今のこの大学をご覧に